

# 好奇心と破滅

## 『実伝ファウスト博士』にみる愚者概念

森下 勇矢

### 序 物語のあらまし

作者不詳の『実伝ファウスト』（*Historia von D. Johann Fausten*, 1587）は、出版者ヨーハン・シュピースにより世に送られた。この作品は多くの読者を獲得して版を重ねたのみならず、海賊版なども出回るほどの人気ぶりであった。オランダ語やフランス語等の様々な外国語にも訳され、1599年にはゲオルク・ルドルフ・ヴィトマン（*Georg Rudolf Widmann*, 1550-1600）の手によって全く新しい形に再構成される。さらに、英訳を通して劇作家クリストファー・マーロウ（1564-1593）の戯曲『フォースタス博士の生と死の悲劇的物語』（*The Tragical History of Doctor of the Life and Death of Faustus*, 1604 / 1616）が完成する。マーロウの作品は17世紀の初めごろから活躍し始めた「イギリス劇団」によってドイツに紹介されており、こうした民衆劇と並行して人形劇も発達し、後のレッシングやゲーテに影響をもたらすに至った。長い受容史の中で、その都度様々な人物像が付与されていくファウストであるが、かつて実在していたとされる彼の存在は多くの研究を経ても依然として謎に包まれている。しかしながら、15世紀末にまで遡るこのファウスト伝説からトーマス・マン（1875-1955）の手による『ファウスト博士』（*Doktor Faustus*, 1947）に至るまで、いずれのファウスト像も私欲ゆえに悪魔に身を売る者の姿を映し出す。

ここでまず、『実伝』の梗概を紹介しておきたい。百姓の息子としてヴァイマルに生を受けたファウストは、ヴィッテンベルクに住む裕福な叔父のもとで育てられ、神学を学ぶ。並外れた勉学の才能を有していた彼は、学問において優秀な成績を収め、神学博士の称号を得るも、そこに神への信心はなく、呪術や招霊術のような魔術に手を染めていく。ある日、好奇心に駆られたファウストは、魔法陣を描いて悪魔を呼び出すことを試みる。悪魔を召喚したファウストは、彼を呪縛したうえで己の望みを叶えるように説得しようとする。メフォストフィレスと名乗るこの悪魔は、後日ファウストの前に現れ、ある条件と引き換えに彼の願いを叶えることを約束する。その条件とは、血の証文を通して契約を結び、それから24年が過ぎたときに悪魔によって命を奪われるというものであった。メフォストフィレスとの契約を結んだファウストは、酒池肉林の暮らしを送り、愛欲に溺れて悪魔との淫行を重ねていく。世界各地を旅してまわり、魔術を用いて多くの人々を翻弄する彼であったが、目前に迫る自身の最期を思っ悲嘆に暮れる。ファウストの後悔と悲痛な嘆きも虚しく、悪魔との契約から24年目の夜、彼はメフォストフィレスに八つ裂きにされる。

## 1. ファウストの愚

物語冒頭、ファウストの両親や彼の幼少期が語り手によって紹介されたのち、彼の卓越した勉学の素質や、他の修士を圧倒する成績を収めて神学博士になった有能ぶりが語られる。しかしながらその直後、こうした彼の博学多識な様子とは対照的な、彼の愚に関わる負の側面が以下のように言及される。

そのほか、彼は思索に耽る輩と常と呼ばれていたように、愚かでたわけた高慢な頭脳の持ち主で、悪の徒党に加わる次第となり（……）

Daneben hat er auch einen thummen / vnsinnigen vnnd hoffertigen Kopff gehabt / wie man jn denn allezeit den Speculierer genennet hat / Ist zur bösen Gesellschaft gerahten（……）（Historia, S. 14）

1

ここにある「愚かでたわけた」という表現はしかし、単なるファウストの愚鈍さを示すものではない。この箇所直前にある文章から、ファウストが卓越した知性を有していることが明らかであり、その愚はむしろ「傲慢 *superbia*」へと向かう彼の誤った方向性を表現している。ファウストの愚は彼の「傲慢」と密接に結びつき、作品の中では忌むべきものとして扱われるが、そこではルター派の修道士と推測される著者の、作品に教化的要素を持たせて人々を罪や愚行から遠ざけようという意図が表れている。こうした読者に対する戒めの書としての性質は、『実伝ファウスト』の物語全体を通して色濃く表れており、その最たるものは作品の結末に認められる。ファウストとメフォストフィレスが契約を結んでから 24 年後の夜、ファウストは地獄に怯えながら無残な死を遂げるが、彼が死を遂げた現場の描写は、「彼の脳が壁にへばりつき」、「彼の目やいくつかの歯がいたところに転がっていた」などと極めてグロテスクである。この凄惨なファウストの死が、読者への警告として用いられたことは、後に紹介する語り手の発言からも明らかである。

ファウストの悲惨な最期がメフォストフィレスの契約に端を発するものであり、語り手の主な批判の対象が魔術や悪魔に身を委ねる行為であることは論をまたない。しかしながら、ファウストの生前の様子はいわば、人々が避けるべき愚が各章にわたって個人に投影されたものであり、そこでなされる諷刺の対象は、前述の彼の「傲慢」をはじめ、色欲や放埒など多岐に渡る。そしてこれらは主に 7 つの大罪に含まれ、ファウストの愚はこうした罪を包括するものであり、これと不可分の関係にある。

---

<sup>1</sup> 作品本文からの引用は、以下のテキストから行う。Historia von D. Johann Fausten. Hg. von Stefan Füßel, Hans Joachim Kreutzer. Stuttgart (Philipp Reclam) 2006. なお、引用の際には Historia と略記したうえで、頁数を付記する。

本論ではテキストに沿いつつファウストの愚が持つ性質を見ていくが、ここでは『実伝』の戒めの書としての側面に留意しながら分析を行う。さらに、ファウストの「傲慢」と結びつく概念「好奇心 *curiositas* / *Fürwitz*」を取り扱う。中世から近世にかけて、アウレリウス・アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) 以降の「知」への批判意識、つまり「好奇心」を一概に己の目を愉しませるための退廃的欲求 (*concupiscentia oculorum*) とする考えが主流であった時代に、これらの諸概念がファウストの愚との関係においてどのように立ち現れるかを明らかにする。以上の分析の過程で、セバスティアン・ブランツ (Sebastian Brant, 1457-1521) の『阿呆船』 (Das Narrenschiff, 1494) を始めとした「阿呆文学 *Narrenliteratur*」なども考察に取り入れ、『実伝』に込められた「愚者概念」を可能な限り広い視野から捉えていく。

## 2. ファウストの罪

ファウストの愚の本質は、物語中で繰り返し彼を形容する語「*gottloß*」、つまり神に背き、離反する罪人としての態度に表れる。ファウストに付与された愚の根幹にあるのは「傲慢」であるが、この概念と愚の繋がり近世の阿呆文学の中でも多く扱われており、例えば『阿呆船』の92章「思いあがった高慢さ *Vberhebung der hochfart*」では以下のようにある。

2

神が憎む高慢な者は、さらに  
高く、いや高くへと昇り続け、  
しかし最後には地獄のルチファーの  
もとへと落ちていくのだ。  
聞け、高慢な者よ。お前自らの  
口からこう言う時が来るのだ。  
傲慢が私にどんな喜びをもたらすのか。  
苦難と苦しみの中にあるのに。

Der hochfart die do hant gotts haß  
Stigt stätes vff / ye baß vnd baß  
Vnd fellet zü letst zü boden doch  
Zü Lucifer jnns hellenloch /  
Hör hochfart / es kumbt dir die stundt  
Das du sprichst vß dym eygnen munt  
Was bringt myn hoher müet mir freud  
So ich hie sitz jnn trübsal / leid /  
(NS, Kp. 92, 85-92)

この引用箇所を含む章の主題である「心の高慢は倒れに先立つ *Hochmut kommt vor dem Fall*」という聖書の言葉 (箴言 16:18) は、諺としてのみならず寓話のテーマとして取り上げら

---

<sup>2</sup> 作品本文からの引用は以下のテキストから行う。Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Nach der Erstausgabe (Basel 1494) mit den Zusätzen der Ausgaben von 1495 und 1499 sowie den Holzschnitten der deutschen Originalausgaben. Hg. von Manfred Lemmer. 4. erweiterte Auflage. Neudrucke deutscher Literatur Werke. Neue Folge. Bd. 5. Tübingen (Max Niemeyer). Berlin / New York (Reprint de Gruyter) 2004. なお、引用の際には NS と略記したうえで、章番号と詩行番号を付記する。

れており、「傲慢」と愚の結びつきは一般の人々にとって馴染みあるものであった。<sup>3</sup>そうした周知の愚を体現するのが、謝肉祭劇などで親しまれた道化姿の愚者であり、この存在は『阿呆船』内で、ブランド独自の愚者概念を孕む者として登場する。

『阿呆船』に登場する愚者に織り込まれた多岐に渡る性質のうち、「神からの罪深い離反、そしてそれに伴う教義と聖書の軽視」は、ブランドの愚者の本質であるとともに、『実伝』のファウストの姿勢と類似しているとブリュッゲマンは述べる。<sup>4</sup>『実伝』の語り手は、ファウストの「傲慢」をどのように描き出しているだろうか。ファウストが血の証文を書き上げたのち、作品に挿入された詩句は以下のように始まる。

自惚れと高慢を欲し、  
それらに愉悦や気力を求め、  
悪魔の言いなりになる者は、  
己に自らの鞭を打つのであり、  
仕舞いに魂と体、財産を失う。

Wer sein Lust setzt auff stoltz vnd Vbermuht  
Vnnd darinnen sucht sein Freuwd vnd Muht /  
Vnd alles dem Teuffel nach thut /  
Der macht vber jhne ein eygen Ruht /  
Vnd kompt endlich vmb Seel / Leib vnd Gut.  
(Historia, S. 23)

人間の「傲慢」に対し警鐘を鳴らすこの詩句が、ファウストが悪魔との契約を交わす直後に挿入されることで、その過ちと彼の傲慢さとの連関はより強固なものとなる。血の契約を結んで以降、ファウストはメフォストフィレスの力により栄耀栄華を極め、「神や地獄、さらには悪魔など居ないと信じる」<sup>5</sup>ほど、己の高慢さに囚われていく。そしてさらに、この詩はブランドの『阿呆船』からとられたものであるが、ブランド特有のユーモアを交えた比較的穏やかな愚者への批判は、罪と悪に対する辛辣な攻撃へと修正が施されている。<sup>6</sup>確かにブリュッゲマンの指摘通り、ファウストの愚は神の存在を無視する高慢な態度に

<sup>3</sup>例えば「イソップ物語」に属する『カラスと狐』では、盗んだ肉を喰えたカラスに対し、狐がカラスの大きさや容姿を褒めちぎる。狐はさらに、カラスが美しい歌声をもっていれば、あらゆる鳥を凌ぐ権力をもつことを示すと付け加えると、カラスは美しい歌声を聴かせようとして嘴を開き、肉は落下して狐に食べられてしまう。おだてられたカラスが昂って損をしてしまうというこの物語は、「イソップ物語」はハインリヒ・シュタインヘーヴェル (Heinrich Steinhöwel, 1410-1479) によって 1476 年にラテン語からドイツ語に翻訳され、出版社ヨハン・ザイナーのもとで『高名なる寓話詩人イソップの本と生涯 Buch und Leben des hochberühmten Fabeldichters Aesopi』と題して刊行された。なお、ここで紹介した『カラスと狐』のあらすじについては、以下のテキストを参照した。Äsop: Fabeln. Griechisch-deutsch. Hg. von Rainer Nickel. Sammlung Tusculum. Düsseldorf / Zürich (Artemis & Winkler) 2005, S. 127.

<sup>4</sup> „die sündhafte Gottesferne sowie die damit einhergehende Missachtung der Lehre und der Heiligen Schrift“ Romy Brüggemann: Die Angst vor dem Bösen: Codierungen des malum in der spätmittelalterlichen und frühneuzeitlichen Narren-, Teufel- und Teufelsbündnerliteratur. Würzburg (Königshausen u. Neumann) 2010, S. 48.

<sup>5</sup> „(.....) glaubet nit daß ein GOTT / Hell oder Teuffel were“ (Historia, S. 27)

<sup>6</sup> Frank Baron: Faustus on Trial: The Origins of Johann Spies's 'Historia' in an Age of Witch Hunting. Frühe Neuzeit. Bd. 9. Tübingen (Niemeyer) 1992, S. 92. なお、ブランドの詩句は『阿呆船』3章に付された表題句であり、

においてブラントの愚者と類似するものの、その性質は徹底的に糾弾されるべきものであり、その罪はより深い。両者の本質的差異はやはり、ファウストがブラントの愚者とは異なり、悪魔との契約や、魔術の利用といった行為に手を染めていることに起因するのである。

『実伝』が本来戒めの書として著された背景を踏まえ、読者への警告の試みがよく表れた箇所も挙げておく。物語の最後に語り手は次のように読者に呼びかける。

斯くして、ファウスト博士の真実なる全ての物語と魔術は終わりとなる。ここからあらゆるキリスト者、とりわけ奢り昂り自惚れた、奇を好みかつ不従順な精神と頭脳の持ち主は、神を畏れ、神が固く禁じた魔術や召喚術そしてその他の悪魔の業から遠ざかり、ファウストが行ったように悪魔を招き入れ、あるいは隙を与えるのを防ぐことを学ばねばならない。

Also endet sich die gantze warhafftige Historia vnd Zauberey Doctor Fausti / darauß jeder Christ zu lernen / sonderlich aber die eines hoffertigen / stoltzen / fürwitzigen vnd trotziges Sinnes vnnd Kopffs sind / GOtt zu fürchten / Zauberey / Beschwörung vnnd andere Teuffelswercks zu fliehen / so Gott ernstlich verboten hat / vnd den Teuffel nit zu Gast zu laden / noch jm raum zu geben / wie Faustus gethan hat. (Historia, S. 123)

読者への最後の呼びかけに記された「奢り昂り自惚れた」という言葉に、「傲慢」に対する著者の強い危惧と批判意識が表れている。しかしながら、引用箇所にあるように『実伝』が警鐘を鳴らす主な対象は「傲慢」にとどまらず、その批判は「傲慢」の延長線上にある魔術へと向けられていく。

ファウストの魔術は作品の根幹をなすものであると同時に、魔術そのものが「傲慢」との強い親和性を有している。16世紀の人々が魔術の存在を信じており、さらにそれを「単なる自然法則の否定としてのみならず、むしろ神の権力範囲の侵害」と見なしていたことから、魔術が「傲慢」の表れであるとシュミットは説く。<sup>7</sup>シュミットは続けて、ファウストがメフォストフィレスに連れ去られてしまう原因について、彼がすでに最初から神との誤った関係性にあつたことから、悪魔の手中にあつたためと論じている。<sup>8</sup>確かに、ファウストが魔術に手を染め、悪魔と契約を交わし、最終的に破滅へと至ったその根本的な原因を求めると、それがファウストの神に対する「傲慢」であることは疑いえない。しかし、彼の「傲慢」が直接的に様々な魔術の習得へとファウストを向かわせたという論に

---

以下の通り。 „Wer setzt sin lust vff zytlich güt / Vnd dar jnn sticht sin freyd vnd müt / Der ist eyn narr jnn lib vnd blüt“ (NS, Kp. 3)

<sup>7</sup> „(.....) nicht bloß als Aufhebung von Naturgesetzen, vielmehr als Selbstüberhebung und als Übergriff in den Machtbereich Gottes“ Schmidt (2001), S. 16.

<sup>8</sup> Vgl. ebd.

も飛躍がある。ここで「傲慢」と魔術の橋渡し役を担うのが、上に挙げた引用箇所にある「奇を好む *fürwitzig*」という性質であるためだ。

### 3. ファウストの好奇心

かつて原罪の結果の一つとして考えられた「好奇心 *Fürwitz*」は、人文主義やルネサンスがもたらした新しい学問の中でその正当性を認められつつも、依然として人間を「傲慢」へと誘う罪として見なされていた。<sup>9</sup>なお、ファウストの好奇心が彼の「傲慢」から生じるものとする論もあるため、ここでは両概念を相互に影響し合うものとして扱うにとどめ、概念の派生元について詳細に扱うことは控える。<sup>10</sup>いずれにせよ、近世において好奇心は人を罪へと導くものとして否定的な見方をされてきたのであるが、ここでまずこの概念が持つ歴史的な背景を概観しておく。<sup>11</sup>

「*Fürwitz*」という語はラテン語「*curiositas*」と同義であるが、キケロ（*Marcus Tullius Cicero*, 106-43 v. Chr）がローマに住む親友アッティクスに宛てて書いた手紙の中で、ラテン語の形容詞「*curiosus*」を名詞形「*curiositas*」として用いたのがこの語の起源である。この語が生まれた時点では、これはセンセーションを見聞きしたがる欲求を表し、ひとえにネガティブな性質を持つものであった。この概念をキリスト教的文脈での「悪習の一覧 *Lasterkatalog*」に組み込んだのが、ローマ帝国時代の神学者であり、『神の国』（*De Civitate Dei contra Paganos*, 413-426）の著者である教父アウグスティヌスであった。彼の代表的な自伝『告白』（*Confessiones*, 397）10巻35章にて、「肉欲の教え *Konkupiszenz-Lehre*」<sup>12</sup>が説かれているが、ここで己の眼を愉しませたいという人間の欲求は好奇心の一部分として、さらに人の罪に通ずるものとしてみなされた。アウグスティヌスにとっての好奇心とは、「肉の欲求や傲慢さと結びつく目の快楽、謙りや単純さ、節度に対置される」<sup>13</sup>概念であったが、その性質は必ずしも否定的なものにとどまらないことには留意する必要がある。

フーラーは「アウグスティヌスは好奇心を誤った好奇心と敬虔な好奇心の二つに区別しており、後者は超越的真実や神を見出そうとする願望に導かれた好奇心である」と説明

---

<sup>9</sup> Vgl. Jörg Wesche: Wissen und Glaube. In: Faust-Handbuch. Konstellationen – Diskurse – Medien. Hg. von Carsten Rohde, Thorsten Valk, Mathias Mayer. Stuttgart / Weimar (J. B. Metzler) 2018, S. 98-104, hier S. 99.

<sup>10</sup> Vgl. Antje Wittstock: Melancholie. In: Faust-Handbuch. Konstellationen – Diskurse – Medien. Hg. von Carsten Rohde, Thorsten Valk, Mathias Mayer. Stuttgart / Weimar (J. B. Metzler) 2018, S. 113-119, hier S. 117.

<sup>11</sup> 好奇心の概念の変遷に関しては、主に以下の文献を参照。Marina Münkler: Narrative Ambiguität: die Faustbücher des 16. bis 18. Jahrhunderts. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 2011, S. 228-236.

<sup>12</sup> Wesche (2018), S. 99.

<sup>13</sup> „(.....) Augenlust, die sich mit der voluptas carnis und der superbia verbindet und den Tugenden der humilitas (Demut), simplicitas (Einfachheit) und temperantia (Mäßigung) entgegengesetzt ist.“ Münkler (2011), S. 232-233.

する。<sup>14</sup> これは換言するならば、神の創造物に神の存在やその意志を認識しようとさせる好奇心である。<sup>15</sup> アウグスティヌス以降、好奇心を完全に否定的な概念としてみなした中世の神学者の数はわずかで、多くの場合に好奇心はアンビヴァレントな性質を持つものとして扱われた。<sup>16</sup> 後世のマルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) はアウグスティヌス同様に好奇心を「肉の好奇心 *curiositas carnis*」と「精神の好奇心 *curiositas spiritualis*」の二つに区分し、前者をアウグスティヌスが論じた「肉の喜び *voluptas carnis*」に通ずる誤った欲求として、後者を神を信じて求めようとする願望として捉えた。<sup>17</sup> 精神の好奇心とは、ルターの解釈によれば、悪魔を避け、聖書の言葉を拠り所にするを要請するものである。ルターと同時代を生きたとされるファウストと、彼の好奇心によって惹起される破滅へのプロセスは、近世ドイツにて興隆した愚のディスクルスにおいて、いかなる様相を呈するだろうか。

魔術と「傲慢」はともに、「神の権力範囲」を度外視するものであることは先に述べた。ファウストの僭越な心持ちにあわせ、「許された知識の境界を無視」<sup>18</sup> する好奇心が彼に働きかけることで初めて、彼は魔術へと手を伸ばすのである。それゆえ、彼の好奇心は神を見出そうとする類の敬虔な好奇心ではなく、むしろ神を蔑ろにする傲慢な好奇心である。魔術への好奇心が最も明確に表現される箇所をここに挙げておく。

上述のように、ファウストの意欲は愛すべからざるものを愛することに向かい、これについて日夜思考を巡らし、驚の翼を身に付けて天地の奥の奥を極め尽くそうとしていた。そして彼の好奇心や奔放さ、さらに軽率さが彼を刺激し、彼はある時、悪魔を目の前に呼び出すためのいくつかの魔術の文言や図形、記号や呪文を実際に使おうとしたのである。

---

<sup>14</sup> „(.....) Augustinus unterscheidet zwischen ‚falsch‘ ausgerichteter und ‚frommer Neugier‘ (pia curiositas), die von dem Verlangen geleitet ist, die transzendente Wahrheit und Gott zu finden.“ Therese Fuhrer: Das Verlangen nach Unbekanntem. In: Akademie Aktuell. Heft 3 - Aug. 69. München (Bayerische Akademie der Wissenschaften) 2019, S. 20-25, hier S. 25.

<sup>15</sup> Vgl. Gunther Bös: *Curiositas: die Rezeption eines antiken Begriffes durch christliche Autoren bis Thomas von Aquin*. München (Schöningh) 1995, S. 129.

<sup>16</sup> 例えば 13 世紀の神学者アルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus, 1193-1280) は「熱心さ・入念さ *studiositas*」の概念を新たに取り入れ、これを「知性的徳 *virtus intellectualis*」とし、彼の弟子トマス・アキナスはこの概念を理性に導かれて神を認識するための道 (*via rationis*) を歩むための条件として扱った。神の創造物を観察することが、気散じに終わることなく、神を認識することへの努力に結びつく場合に限り、「好奇心 *curiositas*」は「熱心さ」として肯定的評価が与えられたのである。Vgl. Münkler (2011), S. 234.

<sup>17</sup> Marina Münkler: Semantische Kohärenz, narrative Inkohärenz? In: *Erzählen und Episteme. Literatur im 16. Jahrhundert. Frühe Neuzeit*. Hg. von Beate Kellner, Jan-Dirk Müller, Peter Strohschneider. Bd. 136. Berlin / New York (De Gruyter) 2011, S. 92-123, hier S. 107.

<sup>18</sup> „Missachtung von Grenzen des erlaubten Wissens“ Fuhrer (2019), S. 22.

Wie obgemeldt worden / stunde D. Fausti Datum dahin / das zulieben / das nicht zu lieben war / dem trachtet er Tag vnd Nacht nach / name an sich Adlers Flügel / wolte alle Gründ am Himmel vnd Erden erforschen / dann sein Fürwurz / Freyheit vnd Leichtfertigkeit stache vnnd reizte jhn also / daß er auff eine zeit etliche zäuberische vocabula / figuras / characteres vnd coniurationes / damit er den Teufel vor sich möchte fordern / ins Werck zusetzen / vnd zu probieren jm fürname. (Historia, S. 15)

「天地の奥の奥を極め尽す」という、「神の権力範囲」を犯すような好奇心に駆られたファウストは、悪魔を召喚し、彼と血の契約を結んで墮落の一途を辿り始める。ファウストを支配するのはルターやアウグスティヌスの説く「誤った好奇心」であるうえ、これが原因となりファウストが無残な死を遂げるという結末に鑑みても、作中で描かれる好奇心に何らかの肯定的側面を見出すことは難しいだろう。しかし、ここで改めて悪魔との契約以後のファウストの心理描写に目を向けつつ、好奇心が彼にもたらした顛末についてみていきたい。

ファウストがメフォストフィレスと契約を結んだ時には、彼は自らの過ちを理解していない状態にあるのは明らかであり、彼が自らの失敗を悔やむ時点では時すでに遅く、彼は完全にメフォストフィレスの手中にあった。ファウストは悪魔からルチファーが地獄に落とされた理由について聞かされたのち、自分を待つ苦しみに絶望して嘆く。

ああ、この上なく嘆かわしい。私も同じ道を辿るだろう。私も彼と同様に神の創造物であるのに、私の高慢な肉と血は私の肉体と魂を永劫の罰へと導き、私の理性と精神でもって私を駆り立て、神に創られたものでありながら私は神から離れ、悪魔の言葉に従い、その悪魔に自分を肉体と魂ごとと委ね、売り渡してしまったのだ。それゆえ、私はこれ以上の恩寵を願うことは不可能であり、ルチファーのように永遠の劫罰と苦しみに追いやられてしまうのだ。ああ、何という嘆かわしさ。己を責めても何になろう。ああ、私は生まれるべきでなかったのか。

O weh mir jmmer wehe / also wirt es mir auch gehen / denn ich bin gleich so wol ein Geschöpff Gottes / vnnd mein vbermühtig Fleisch vnd Blut hat mich / an Leib vnd Seel / in Verdammlichkeit gebracht / Mich mit meiner Vernunfft vnd Sinn gereitzt / daß ich als ein Geschöpff Gottes von jme gewichen bin / vnd mich den Teufel bereden lassen / daß ich mich jhme mit Leib vnd Seele ergeben / vnd verkaufft habe / Darumb kan ich keiner Gnade mehr hoffen / Sondern werde wie der Lucifer in die ewige Verdampnuß vnd Wehe verstossen / Ach wehe jmmer wehe / was zeihe ich mich selbst? O daß ich nie geboren were worden? (Historia, S. 33)



この箇所以降、幾度かファウストは悪魔と契約を結んだことを後悔するものの、悪魔の手練手管により彼が悔い改めることは叶わない。『実伝』の第二巻に入り、いよいよファウストが好奇心の虜になってメフォストフィレスに天体や天地創造について尋ね、世界中や地獄を旅し始めると、自責の念は彼から消え失せ、他の博士に占星術や霊について説き、魔術で農民を狼狽させ、学生と乱痴気騒ぎを行い始める。この間、メフォストフィレスは後景に退いていき、第二巻の終盤から第三巻の中盤まで完全にほとんど姿を見せなくなる。<sup>19</sup>そして、第三巻にてファウストが敬虔な翁の戒めをうけ、回心しようと考え始めたその時、メフォストフィレスは再び彼の前に現れる。

そのようにファウストが考えていると、彼の霊が現れ、まるで彼の頭を捻ろうとするかのように彼へと手を伸ばすのであった。そして、何がファウストを悪魔に身を捧げるような真似をしたのか、彼自身の高慢な心持ちではないのかと非難を浴びせた。それに加え、神と全人類の敵となることを約束したのに、今やそれに背き、老人に従おうとし、一人の人間と神に取り入ろうとしているが、そのためにはもう手遅れであり、彼は悪魔のもので、彼を拐っていくことなど容易いのであると捲し立てた。

In solchen Gedancken erscheinet jm sein Geist / tappet nach jm / als ob er jhme den Kopff herumb drehen wollte / vnd warff jm für / was jhn dahin bewogen hette / daß er sich dem Teffel ergeben / nemlich sein frecher Mutwillen. Zu dem habe er sich versprochen / Gott vnd allen Menschen feind zuseyn / diesem versprechen komme er nu nit nach / wölle dem alten Lauren folgen / einen Menschen vnd Gott zu huld nemmen / da es schon zuspat / vnd er deß Teuffels seye / der jhn zuholen gut macht habe (.....)

(Historia, S. 103)

こうして、悪魔と二度目の血の契約を結ぶファウストであるが、彼はこの後幾度となく悲嘆に暮れることとなる。<sup>20</sup>最初の契約から二十四年が経ち、死の直前に取り巻きの学生か

---

<sup>19</sup> クラークは、悪魔が舞台上から姿を消してしまうことについて、「彼（ファウスト）自身が己の悪魔となる」., (.....) er wird zu seinem eigenen Dämon“と論じている。William Clark: Also sprach Wagner. Von faustischen Narren zu Wissenschaftstradition. Zeitschrift für Ideengeschichte. Heft IV/2: Idioten. München (C. H. Beck) 2010, S. 21.

<sup>20</sup> 一回目の契約の時点から十七年たったあとの二度目の契約であるが、ファウストが血で記した証文の内容は第一回目とは微妙に異なる。まず第二回目においては七年後にルチファーにファウストが自己を委ねること、さらに彼が今後キリスト者らの教えに従わないことが書かれている。二度目の契約は、翁の忠告によって回心に気持ちが傾いたファウストに、一度目の契約内容を再確認させ、さらに周囲の助言を無力化させる意味合いを持つ。なお、メフォストフィレスの主君として紹介されるルチファーは、神に叛逆し墮天使となった存在であるが、本来非常に美しく輝か

ら回心をするように勧められてもなお、ファウストは悪魔の制裁を恐れ、そして自らの罪の重さゆえに神の救済を諦めてしまう。そして翌日、彼の遺体は見るも無残な状態で発見される。

以上が、ファウストの愚の核である「傲慢」と好奇心の大まかな性質と、これらに支配され、悪魔に取り憑かれた人物が辿るべき結末である。そして、ここまで「神からの離反」という愚者の特性にフォーカスして論を進めてきたが、これに加えてファウストの愚を「不完全な自己認識」という側面から分析していきたい。ここでいう自己認識とは、己の罪深さを識ることであり、それを通じて罪人は悔い改めへと導かれる。そして愚者を愚者たらしめるのは、己を識らぬことであり、自己認識の欠如である。このことは、愚者文学の中心テーマでもある。

#### 4. 自己認識と神

自己認識と愚の関係性について着目する前に、自己の罪を正しく認識することが、回心とどのように結びつくかを確認しておく。18 世紀中頃に著されたツェードラーの百科辞典には、以下のように回心のプロセスが記されている。

(行為や心情における) 悪が大きく、それへの認識が強いほど、これに対する嫌悪の念は大きくなり、そこに悪がある場合、この嫌悪から不快感が生まれ、この不快感が強ければ、悲しみがこれに続くのである。そして罪人は自らの人生を改め始めるために、悲しまねばならない。(括弧内著者)

Je größer das Böse und ie stärker das Erkennen; desto größer ist auch die Verabscheuung; aus dieser Abscheu entsteht, wenn das Böse da ist, Verdruß, ist dieser heftig, so folget Traurigkeit; und muß der Sünder Traurigkeit haben, indem er die Veränderung seines Lebens anfängt.<sup>21</sup>

ここに記された事柄に従えば、過去の行いを激しく後悔して悲嘆に暮れるファウストは、十分に「自らの人生を改める」段階にあったと言える。そして実際、二度目の血の契約を結ぶ直前にファウストは、敬虔な老人の訓戒を受けて回心の直前にあった。しかし、この引用箇所にある罪の認識から悔い改めへの一連の流れが機能しなかったことにより、最終的に彼は悪魔の脅しに屈さなくてはならない。本章では、その要因を自己認識の観点から考察していく。

---

しい智天使であり、己の高慢によって神に地獄へと堕とされたことがメフォストフィレスによって説明される。Vgl. Historia, S. 32.

<sup>21</sup> Vgl. Heinrich Zedler Johann: Art. Bekehrung. In: Nöthige Supplemente zu dem vollständigen Universal-Lexikon aller Wissenschaften und Künste, Welche bißhero durch menschlichen Verstand und Witz erfunden und verbessert worden. Bd. 3. Leipzig (Johann Heinrich Zedler) 1752, Sp. 515-517, hier Sp. 516.

ファウストが物語終盤で自らの罪を嘆きながらも、悔い改めへと至らなかった理由として、悪魔の報復に対する恐れなどがファウスト自身の口から挙げられる。<sup>22</sup> しかしながら、こうした恐怖心は表面的なもので、回心を妨げる本質的要因は彼が抱える神への猜疑心にあった。以下、先に挙げたファウストの嘆きの箇所の続きであるが、彼の心情を表す語り手の言葉である。

このように嘆いたファウスト博士であったが、彼は悔い改めによって神の恩寵にあずかることができるという信仰や希望を抱こうとはしなかった。というのも、もし彼が「私はいまや悪魔に色を塗られたために、天を仰ぐばかりになった。さあ、私は回心するのだ。そして神に恵みと赦しを求めてみよう。二度と行わないことも歴とした悔い改めであろう。」と考え、そしてキリスト教信仰者らの集いに加わり、聖なる教えに従っていたならば、例え肉体をここで失ったとしても、魂は保たれたであろう。しかしながらファウストは、彼の思いや考えるところ全てにおいて疑念に満ち、不信心かつ絶望していた。

Diese Klage führte D. Faustus / Er wolte aber keinen Glauben noch Hoffnung schöpfen / daß er durch Buß möchte zur Gnade Gottes gebracht werden. Denn wenn er gedacht hette: Nun streicht mir der Teuffel jetzt eine solche Farbe an / daß ich darauff muß in Himmel sehen / Nun so wil ich wider vmbkehren / vnd Gott vmb Gnade vnd Verzeihung anrufen / Denn nimmer thun ist ein grosse Buß / hette sich darauff in der Christlichen Gemein in die Kirchen verfügt / vnnd der heyiligen Lehre gefolget / dardurch also dem Teuffel einen widerstand gethan / ob er jm schon den Leib hie hette lassen müssen / so were dennoch die Seele noch erhalten worden / Aber er wardt in allen seinen opinionibus vnnd Meynungen zweiffelhafftig / vngläubig vnd keiner Hoffnung. (Historia, S. 33)

こうした神の赦しに関する記述には、悔い改めて神に立ち返ることで、神の恩寵により義と認められるという新教派の教えが基調になっている。同様のことがファウストの死の直前、学生からの勧めとして語られるものの、ファウストは神の赦しに対する不信を捨て切ることができない。

---

<sup>22</sup> 「隣人は私に彼の教えに従い、魔術から離れて回心するようにと言ってくれた。この戒めに従おうとすると、悪魔が私のもとに来て、今晚彼が私にするのと同様に連れ去ろうとし、もし神に立ち返ろうとするならば、彼は私を始末してしまうつもりだと言ったのだ」 „Wie mich auch mein Nachbawr darumb angesprochen / daß ich seiner Lehre folgen sollte / von der Zauberey abstehen / vnd mich bekehren. Als ich dann dessen auch schon willens war / kam der Teuffel / vnd wolt mit mir fort / wie er diese Nacht thun wird / vnd sagte: So bald ich die bekehrung zu GOtt annehmen würde / wölle er mir den Garauß machen“ (Historia, S. 121-122)

(学生による悔い改めの勧めに対し) 彼は同意し、祈ろうとしたが、うまくいかない。それはまるで、「赦されるには自分の罪は大きすぎる」と言ったカインのようであった。

Das sagte er jnen zu / er wolte beten / es wolte jhme aber nit eingehen / wie dem Cain / der auch sagte:  
Seine Sünde weren grösser / denn daß sie jhme möchten verziehen werden (Historia, S. 122)

この箇所が示すように、ファウストの回心を阻むのは彼の罪の大きさゆえの絶望であるが、その内実は先述の通り神の救済への懷疑である。ファウストが物語の後半で行う自己反省は、ミュンクラーが指摘しているように「憂鬱な疑念の表出 Ausdruck von melancholischem Zweifel」<sup>23</sup>であって、神への信仰を第一とした義認論の教えにそぐわない。加えて、彼の嘆きは己の罪を正しく認識したことによるものではなく、むしろ彼を待ち受ける劫罰への恐れによる。ここで、これに関連するミュラーの主張も挙げておく。

ここで指摘すべきはしかし、罰を下す父なる神にファウストが固執していることとの関連である。悪魔が彼の眼前により明瞭に現れるにつれ、プロテスタントの運動とともにようやく実際に隠されたる神（イザヤ 45:15）となる神の存在は、ファウストにとってより抽象的なものになっていく。またそれとともに彼の神に対するイメージの焦点は、より徹底的に神の復讐と罰の意志に向けられていくこととなる。しかしながら、彼はそうした神の像を内面的に受け入れることができない。彼は瞬間的な事柄に没頭し続け、常に彼は肉体や生に対する直接的な脅しにのみ反応していく。彼が自身の罪について思いを巡らせる前に、生命を脅かす危険が明確な形でファウストに想起されるほかないのである。

Hinzuweisen ist aber auf den Konnex mit Fausts Fixierung auf den strafenden Vatergott. Je leibhafter ihm der Teufel vor Augen ist, desto abstrakter wird ihm Gott, der mit dem Protestantismus erst eigentlich zum *deus absconditus* (Jes. 45, 15) wird, desto ausschließlicher konzentriert sich die Vorstellung auf dessen Rache- und Vergeltungsgelüste. Eine Verinnerlichung jedoch mißglückt. Immer gibt er sich dem Augenblick hin, immer reagiert er nur auf die unmittelbare Bedrohung von Leib und Leben. Tödliche Gefahr muß ihm sinnfällig in Erinnerung gebracht werden, bevor er seiner Schuld gedenkt.<sup>24</sup>

<sup>23</sup> Marina Münkler: Höllenangst und Gewissensqual. Gründe und Abgründe der Selbstsorge in der „Historia von D. Johann Fausten“. In: Zeitschrift für Germanistik. Bd. 14. Heft 2. Bern u. a. (Peter Lang) 2004, S. 249-264, hier S. 263.

<sup>24</sup> Maria E. Müller: Der andere Faust: Melancholie und Individualität in der Historia von D. Johann Fausten. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Bd. 60. Berlin (Springer) 1986, S. 607.

「隠されたる神 *deus absconditus*」の概念はルター神学の核心をなす思想の一つであるが、これによれば旧約聖書の神が人々に対し怒りのわざをなすとき、神は理性によって把握できない「隠されたる神」として存在する。バルトは、ルターにおけるこの概念のあり方について、ルターが 1531 年に行ったガラテヤ講解における記述をもとに、以下のように説明する。

人間は神が存在することを知っているが、この神が何者なのか、私たちに対して何を計画しているのかを知らない。理性はあらゆる善が神から無条件にもたらされることを把握しうるが、どのようにこの憐れみ深き神が人間に対して、そしてその人間の神に抗うような行いに反応するのかは理性の知るところではないのである。

Der Mensch weiß, dass es Gott gibt, aber er weiß nicht, wer dieser Gott ist, was er mit uns vorhat. Die Vernunft vermag zwar zu erfassen, dass alles unverdankt Gute von Gott kommt. Aber es ist ihr nicht bekannt, wie dieser gütige Gott auf den Menschen und dessen – widergöttliches – Verhalten reagiert.<sup>25</sup>

引き続き本論では、この「隠されたる神」を中心とした神学的背景に触れつつ、ファウストの愚と自己認識の問題について考察を行う。

## 5. 隠されたる神

『実伝』と宗教の結びつきについては、ここまでの論からも明らかなように同作品はルター神学からの強い影響を被っているが、これに対してオイゲン・ヴォルフはファウストをルターのパロディとしてとらえ、『実伝』をカトリック側から新教側に向けられた諷刺文書としている。<sup>26</sup> しかしながら、ヴォルフが挙げた作品内の挑発的な箇所には、新教側内部での衝突が関わっているというのが現在の定説となっている。<sup>27</sup> とりわけ作中で強く表れるルター神学の影響としては、「信仰義認 *sola fide*」や救済が神の「恩寵によるのみ *sola gratia*」なされるというルター由来の救済観であろう。そしてこの救済観が最も強く表れる箇所が、ファウストが己の行いを悔いながらも、救済の条件となる神への信仰に最期まで身を委ねることができず、悪魔の手中に陥ってしまう場面である。

ファウストが回心を経験することができないのは、前述の通り彼は罪の重さゆえに救済を諦めてしまうことと、悪魔による復讐に対する恐れが原因である。しかしながら、もう一つの回心がなされない要因として、ファウストが「神の怒り *Zorn Gottes*」や永劫の罰に

<sup>25</sup> Hans-Martin Barth: Die Theologie Martin Luthers. Eine kritische Würdigung. Gütersloh (Gütersloher Verlagshaus) 2009, S. 196.

<sup>26</sup> Vgl. Eugen Wolff: Faust und Luther. Ein Beitrag zur Entstehung der Faust-Dichtung. Halle (Max Niemeyer) 1912, S. 62-80.

<sup>27</sup> Wesche (2018), S. 102.

対する恐れに囚われている点があげられよう。以下に彼が抱く神の怒りへの恐怖心がよく表れている箇所を引用する。

ああ、永劫の罰よ、お前は神の怒りによって火をつけられて燃え盛り、永遠にあおぐことも必要とせずに燃え続ける。ああ、何たる嘆きと悲しみ、そして痛みが待っているのだろう。そこでは眼は泣き腫れ、歯は噛み締められ、鼻は臭気で苦しめられ、嘆きの声が響き、耳は慄き、手足は震えるのだ。ああ、永劫の罰を避けられるのであれば、天国は喜んで諦めるのだが。

Ach du ewige Verdampnuß / so du vom Zorn Gottes also inflammiert / von Feuer vnd Hitze bist / so keines schürens in ewigkeit bedarff. Ach was Trawren / Trübsall vnd Schmerzens / muß man da gewertig seyn / mit weinen der Augen / knirschen der Zänen / stanck der Nasen / Jammer der Stimm / erschreckung der Ohren / zittern der Hände vnd Füß. Ach ich wolte gerne deß Himmels entberen / wann ich nur der ewigen straffe köndt entfliehen (Historia, S. 117-118)

ここでは救済され天国へと入ることよりもまず、劫罰を避けて苦しみから逃れようとするファウストの心持が色濃く表れている。神の怒りや悪魔への恐れが、ファウストの中で神の赦しの側面よりも、罰を加える神としてのイメージを強め、回心を妨げる障壁となっていく。

「隠されたる神」の対極にあるのが、「現されたる *deus revelatus*」であるが、これはキリストの十字架に如実に表れている。バルトはルター神学における「現されたる神」について以下のように書いているが、この引用箇所にはキリストを通して認識可能となる、怒りの神とは対照的な神の姿が描写されている。

神の怒りのもとでは、神の顔は悪魔の恐ろしい顔へと変貌するかのようであるが、その怒りはキリストの信仰者にとっては脅威（「厳しい怒り」）ではなく、慈悲から生じた神の人間への配慮（「憐れみの怒り」）として表れる。神は、キリストにおいて明らかであるように、律法に圧迫された良心が想定せねばならない、おぞましい審判者や刑の執行者ではなく、自ら和解を行おうとする父である。

Der Zorn Gottes, unter dem sich Gottes Antlitz in die Fratze des Teufels zu verwandeln schien, entpuppt sich für den an Christus Glaubenden nicht als Bedrohung (»ira severitatis«), sondern als eine aus der Barmherzigkeit erwachsene Zuwendung Gottes zum Menschen (»ira misericordiae«). Gott ist, wie

sich an Christus herausstellt, nicht der grausame Richter und Henker, den das vom Gesetz bedrängte Gewissen vermuten muss, sondern der selbst die Versöhnung schaffende Vater.<sup>28</sup>

「隠されたる神」ないし「現されたる神」に関するルターの認識は、バルトによれば十字架の神学が根底にあり、さらに十字架にかかるキリストが示す愛は、「神の自己定義の表出 Ausdruck der Selbstdefinition Gottes」<sup>29</sup>である。ファウストの念頭にある神の怒りとは、まさに「厳しい怒り *ira severitatis*」であって、キリストの十字架を前提とした神の愛の性質とは異なる。自らが受けるであろう罰をファウストが思うとき、その罰を下す神は「悪魔の恐ろしい顔」の裏に隠されており、その赦しや「和解 Versöhnung」はファウストの視野から失せ、救済への希望は失われる。しかし、ここで見るような神と悪魔の関係性は、ファウストが恐れを抱くところの劫罰においてのみ生じるものでない。

生前のファウストが抱く恐れは主に、神と悪魔という一見相対立するような存在に向けられているが、バルトによれば両者は「隠されたる神」の議論内で以下のような関係にある。

神のわざのように見えるものが、実際には悪魔によるものでありえ、悪魔的な様相を呈するものを、実際には神に帰することが可能である。神と悪魔の影響とは、現象的には区別することができず、キリストにおいてのみ神と悪魔は分離するのである。

Was wie göttliches Handeln aussieht, kann in Wahrheit teuflisch sein, und was dämonisch erscheint, kann in Wahrheit auf Gott zurückzuführen sein. Das Wirken Gottes und des Teufels ist phänomenologisch nicht zu unterscheiden; nur in Christus treten Gott und Teufel auseinander.<sup>30</sup>

人間を見下ろす神は、悪魔に支配された人間の姿、つまり罪を見る。これとは逆に、神を見上げる人間は、悪魔によって覆われ、その仮面を被らされた神、つまり怒りの神を認識する。

Gott, der zum Menschen hinabschaut, bekommt dann den vom Teufel beherrschten Menschen zu sehen: die Sünde. Umgekehrt kann der Mensch, der zu Gott hinaufschaut, nur den vom Teufel verdeckten und verummten Gott erkennen: den zornigen Gott.<sup>31</sup>

---

<sup>28</sup> Barth (2009), S. 210.

<sup>29</sup> Ebd., S. 210.

<sup>30</sup> Ebd., S. 209.

<sup>31</sup> Ebd.

前述の通り、キリストの十字架なしには、人間が神と悪魔の行為を区別することは不可能である。<sup>32</sup>それは、悪魔が「光の御使い」<sup>33</sup>になりすまして人を騙し、逆に神は「正反対の姿のもとで *sub contraria specie*」<sup>34</sup> 自己を顕現させるためである。ファウストの恐れは悪魔の復讐や、死後に待つ神の裁きに向けられていることから一見無関係のようであるが、神に対する恐れは作中でメフォストフィレスがファウストに吹き込んだ、いわば悪魔が媒介する神の怒りのイメージである。悪魔と契約した過ちを思い、悲嘆に暮れるファウストに対し、メフォストフィレスは以下のような歌を歌う。

知っているなら黙っている	Weistu was so schweig /
快いなら、そのままでいろ。	Jst dir wol so bleib.
持っているなら、手放すな	Hastu was / so behalt /
不幸が間も無くやってくる。	Vnglück kompt bald.
だから黙って苦しみ、何もせず耐えろ	Drumb schweig / leyd / meyd vnd vertrag /
自分の不幸を誰にも嘆くな。	Dein Vnglück keinem Menschen klag.
すでに遅すぎる、神を畏れるには	Es ist zu spat / an Gott verzag /
お前の不幸はいつでもやってくる。	Dein Vnglück läufft herein all tag.
	(Historia, S. 115)

この句は、ヨハン・マテージウス (Johann Mathesius, 1504-1565) による『マルティン・ルターの生涯』にて、ルターが綴ったものとして紹介されている詩のパロディである。最後の二詩行をのぞき原作とほぼ同じものであるが、変更が加えられた点はもともと「神にすがれ、救いはいつでもやってくる an Gott nicht verzag; dein Hülff kombt alle Tag」<sup>35</sup> となっていた。オリジナルの詩句では明らかに、神の救いの側面にアクセントが置かれている一方、これをもとにメフォストフィレスは罪びとを拒絶する神のイメージを歌う。この物語箇所直後、ファウストは神による劫罰への恐れから回心することを放棄し、破滅への最後の一步を歩むが、これはファウストが悪魔によって吹き込まれた不完全な神の認識に執着し

<sup>32</sup> Ebd., S. 199.

<sup>33</sup> 新約聖書の第二コリント 11 章では、パウロが偽使徒や人を欺く者について言及する箇所があるが、これに続く 14 節には「しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します。」とある。新改訳聖書 (日本聖書刊行会翻訳), 2017, いのちのことば社, II コリント 11:14.

<sup>34</sup> Vgl. Ebd., S. 208.

<sup>35</sup> Johann Mathesius: Ausgewählte Werke / 3: Luthers Leben in Predigten. Hg. von Georg Loesche. 2. Auflage. Bibliothek Deutscher Schriftsteller aus Böhmen. Bd. 4. Prag (J. G. Calveische k. k. Hof u. Universitäts Buchhandlung) 1906, S. 295.



た結果である。ここでもやはり、キリストの十字架に表れる神の愛・和解の性質はファウストの認識から完全に欠落している。<sup>36</sup>

ファウストの最期が近づくにつれ、彼の意識はますます神の「怒り」に対してのみ向けられていき、キリストに表れる赦しの性質が彼の心に浮かぶことはない。信仰にのみ神は顕現し、それによってのみ人は愛の神としての姿を見るのであるが、この愛なる神の存在を、「隠されたる神」の背後にファウストは認識することはおろか、悪魔の報いや肉体的な苦しみなどに対する恐れに囚われ、自らの罪を正しく省みることさえできない。本章の冒頭で述べたとおり、救済にファウストが与りえない原因が、その大前提ともいえるべき信仰の揺らぎや神の恩寵に対する疑念にある点に、ルター神学が著者に与えた影響が最も如実に表れているといえよう。内省を通して自己を知ることはファウストになし得ず、自分の最期の瞬間まで彼は愚者であり続ける。それゆえ、ファウストが自己の罪を正確に認識することはなく、よって神を認識することもなければ、神の「恩寵によってのみ」なされる救済に与ることもない。<sup>37</sup>

ここまでは、「誤った好奇心」と自己認識・神認識の欠落がファウストにもたらした墮落の有り様であるが、語り手は物語を以下の言葉をもって締め括る。

こうして彼の契約と最後のおぞましい見本によって我々は、それらを避けて神のみを愛し、神のみに目を向け、神のみに祈りを捧げ、従い、そして心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして神を愛し、逆に悪魔やその徒党との関係を断ち、最後にはキリストと共に天上の至福に与るべきことを教えられるのだ。アーメン、アーメン、心の底よりこのことを各々に願いつつ、アーメン。

Dann vns hie ein erschrecklich Exempel seiner Verschreibung vnnd Ends fürgebildet ist / desselben müssig zu gehen / vnnd Gott allein zu lieben / vnnd für Augen zu haben /alleine anzubeten / zu dienen vnd zu lieben / von gantzem Hertzen vnd gantzer Seelen / vnd von allen Kräfften / vnd dagegen dem Teuffel vnnd allem seinem Anhang abzusagen / vnd mit Christo endlich ewig selig zu werden. Amen / Amen / Das wünsche ich einem jeden von grunde meines Hertzen / AMEN. (Historia, S. 123-124)

---

<sup>36</sup> ファウストが死の直前に自分の学生に対し、「キリストへのよき信仰をもって mit einem guten Glauben an Christum」 (Historia, S. 120) 悪魔と戦って打ち勝つように説いていることから、彼自身キリストに対する信仰の影響力については理解しているようである。しかしながら、その認識はやはりキリストの赦しや恩寵といった側面には到達せず、不十分なままである。

<sup>37</sup> 12 世紀の神学者ベルナルドゥス (Bernard de Clairvaux, 1090-1153) の解釈によれば、「自己認識」は「神認識」の必要条件である。Notger Slenczka: Reformation und Selbsterkenntnis. Systematische Erwägungen zum Gegenstand des Reformationsjubiläums. In: Glauben und Lernen. Heft 1. Göttingen (Edition Ruprecht) 2015, S. 17-42, hier S. 31.

ここには「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」という申命記 6 章 5 節の言葉が挿入されているが、これはモーセが十戒をイスラエルの民に伝えたのち、彼らに語った言葉である。この教えについてキリストは、マタイの福音書 22 章 37 節にて隣人愛についての教えと並び、最も重要な戒めであると説明する。本論で扱った悪魔との契約や魔術、さらにこれらの引き金となった「好奇心」や「傲慢」はどれもその戒めと対立するものであり、愚と結びつきながらファウストを神から引き離す。キリストを通して愛なる神を認め、これに応答し神を愛することで初めて、その恩寵や救済に与りうるが、ファウストの愚は本人の「自己認識」や「神認識」を阻むものであり、彼を永劫の破滅へと至らしめるのである。

# *Curiositas* und Verderben

## Zur Narrenidee im *Historia* von D. Johann Fausten

Yuya MORISHITA

Das anonym erschienene Werk *Historia von D. Johann Fausten* (1587) wurde vom Verleger Johann Spies herausgegeben. Das Werk fand nicht nur eine große Leserschaft und erschien in vielen Auflagen, sondern wurde auch mehrmals nachgedruckt. In der langen Rezeptionsgeschichte des Fauststoffs erscheint diese Figur in unterschiedlichen Perspektiven. Jedes Faustbild spiegelt das Bild eines Mannes wider, der sich aus Eigennutz dem Teufel verkauft. Aber die Existenz dieses Mannes, den es einst tatsächlich gegeben haben soll, bleibt auch nach vielen Untersuchungen immer noch ein Rätsel. In der Forschung werden die Begriffe *superbia* (Hochmut) und *curiositas* (Fürwitz), die mit der Narrenidee untrennbar verbunden sind, zentral behandelt. Dabei ist es zu untersuchen, wie diese Laster sich auf den religiös-moralischen Untergang des Faustus auswirken.

Der intelligente Faustus scheint mit dem Narrenbegriff nichts zu tun zu haben. Jedoch ist es bemerkenswert, dass man in der *Historia* den folgenden viel zitierten Satz finden kann: „Daneben hat er auch einen thummen / vnsinnigen vnnd hoffertigen Kopff gehabt / wie man jn denn allezeit den Speculierer genennet hat / Ist zur bösen Gesellschaft gerahten (.....)“. <sup>38</sup> Die Wörter „thummen“ und „unsinnigen“ meinen auf keinen Fall nur die Narrheit, weil es aus der Beschreibung klar ist, dass Faustus eine außerordentliche Intelligenz besitzt. <sup>39</sup> Demnach drücken die beiden Wörter „die falsche Ausrichtung seines Geistes, seine Tendenz zur ‚Hoffart‘“ aus. <sup>40</sup> Seine *superbia*, die zu den sieben Todsünden gehört, ist gepaart mit seiner *stultitia*. Diese von der Ursünde stammenden Torheiten führten Faustus in seinen Untergang.

Die *Historia* hat die Eigenschaft eines ermahnenden Buches und aus der Aussage des Erzählers wird deutlich, dass der zentrale Gegenstand der Kritik die *superbia* ist. Aber es ist jedoch nicht nur seine *superbia*, sondern seine sündhafte *curiositas* (Fürwitz), die Faustus dazu bringt, einen Pakt mit dem Teufel zu schließen und sich auf Zauberei einzulassen. Zauberkünste und *superbia* sind lasterhafte Einstellungen, die den Machtbereich Gottes ignorieren. Faustus hochmütige Gesinnung und seine *curiositas* unter „Missachtung von Grenzen des erlaubten Wissens“<sup>41</sup> bewirken, dass er zur Zauberei greift. Zwar bereut er schließlich seine Taten, aber

<sup>38</sup> Zugrunde liegt: *Historia von Dr. Johann Fausten*. Hg. von Stefan Füssel. Hans Joachim Kreutzer. Stuttgart (Philipp Reclam) 2006. Im Folgenden zitiert als *Historia*.

<sup>39</sup> „Als D. Faust eins gantz gelemigen vnd geschwinden Kopfs / zum studieren qualificieret vnd geneigt war (.....)“ (*Historia*, S. 14).

<sup>40</sup> Jochen Schmidt: *Goethes Faust, erster und zweiter Teil: Grundlagen – Werk – Wirkung*. München (C.H. Beck) 2001, S. 17.

<sup>41</sup> Münkler (2011), S. 107.

seine Angst vor dem Teufel hindert ihn daran, eine Bekehrung zu vollziehen. Die Ursache dafür ist eine nur partielle Gotteserkenntnis und darüber hinaus ein Mangel an Selbsterkenntnis, die eine notwendige Voraussetzung für die Gotteserkenntnis ist. Und Fausts Bedauern ist auf seine Angst vor der Vergeltung des Teufels zurückzuführen, was sich von der Reue unterscheidet, die seine Bekehrung hervorruft. Außerdem wird die Bekehrung Fausts durch seinen ‚Zweifel‘ an Gottes Allmacht und seine *desperatio* (Verzweiflung), in der er die Hoffnung für die Erlösung aufgibt, verhindert. Die Selbsterkenntnis durch seine innerliche Selbstreflektion ist für Faust nicht möglich und er bleibt bis zu seinem Ende in seiner Torheit. Aus diesem Grund erkennt er weder Gott, noch kann er die Erlösung erfahren, die nur durch die Gnade Gottes (*sola gratia*) erfolgt.<sup>42</sup>

---

<sup>42</sup> vgl. Notger Slenczka (2015), S. 31.